



意義深い刊行を喜ぶ

昭和48年に道民待望の旭川医科大学が開学されたことは、北海道の医療体制の充実整備に大きな希望の光を点じたものであり、このうえない喜びでありました。

旭川医科大学の創設は、国の深い理解と、用地をはじめ諸般の受入体制の整備にあたられた関係者の努力はもとより、道内各界、各層、更には道民挙げての支援のたまものであり、あらためて心から厚くお礼を申し上げる次第であります。

北海道は、今や、人口550万人を擁し、さらに、21世紀にむけて、明るく豊かな地域社会の建設を目指して力強く前進を続けております。しかしながら広い本道には、医師が不足している深刻な地域もあり、いまなお医療事情は、十分とはいえない状況にあります。

今日の厳しい社会経済環境のなかにあって、福祉の充実と医療体制の確立は、道民の皆さんが最も強く望まれているものであり、“生活優先の道政”を進めていくうえからも、その中核となるべきものと考えております。

この意味において旭川医科大学は、本道における地域保健医療体制の中核として、大きな期待が寄せられているのであります。

このときにあたり、本学の創設の歴史を記した“旭川医科大学の歩み”が刊行されますことは、誠に意義深いものがあり、心からお祝いを申し上げる次第であります。

旭川医科大学が今後とも開学の趣旨を体して、より一層特色ある教育と優れた研究を重ねられ、北方の風土に根ざしたよりよき地域社会の実現のため、重要な役割を果たされることを、全道民とともに期待申し上げるとともに、本学のますますの発展を願ってやみません。

北海道知事 堂 垣 内 尚 弘



発刊に感謝して

旭川医科大学は、昭和48年9月戦後はじめの国立単科医科大学として、多くの期待を担い注目のうちに設置されたが、以来今日まで僅か6年足らずの歳月を経たに過ぎない。

しかしその誘致から設置までの過程は既に20数年に亘っている。地元北海道では夙に、地域の医療過疎を解消し、その水準を向上させるために、総合開発計画の中に、医大の設置計画が盛り込まれたが、誘致から設置までの経緯過程には、紆余曲折があり、幾多の困難があった。しかしその間地元北海道では知事はじめ関係各位の、たゆまぬ努力によって遂に昭和47年旭川医大の設置が約束され、同年創設準備が開始された。創設準備に当っては北海道大学が文部省の委嘱により世話校となつて、急速且つ円滑に進捗したが、これは偏に当時の北大学長はじめ関係各位の親身な協力援助の賜である。創設準備が開始されて間もなく財団法人国立旭川医科大学設置協力が設置されたが、本学は同協力会より多数種の学生実習用並びに研究用機械器具類、図書及び学術雑誌の寄贈をうけ、更に仮校舎の改修整備、教職員の宿舎建設など多大の協力援助をうけ、開学の準備と爾後の大学運営に万全を期すことができた。また協力会は本学の関連教育病院となる市立病院に対しても、病棟などの増築、機器類及び図書等の整備に助成するなど多大の貢献をされた。

このように旭川医大は誘致から設置まで、更には開学後も引続き、地元北海道における各方面の関係機関及び関係各位の多大の協力支援をうけて今日に至ったのであって、この機会に北海道知事、北大学長、協力会会長はじめ関係各位に深甚な敬意と謝意を表するものである。

本学は昭和48年設置以来その建設は学年進行により、その機構及び建築は逐次拡充整備され、それに伴い教育、研究及び附属病院における診療は軌道に乗り、今日に至っている。この学年進行による建設は今年3月を以って、一応完了し、同時に本学の第一期生は卒業して社会へ進出した。このように今年には本学にとっては、意義深い記念すべき年である。この意味もあって、前々から今年を目途に、本学誘致から創設へ、

そして建設完了に至るまでの経緯とその過程の記録を編纂することが企図され、2年前既に本学設置協力会が中心となり、関係各位から成る本学設置記録編纂委員会を設け、鋭意記録資料の蒐集とその編集に力を盡され、ここに本書が上梓されることになった。

本書は旭川医大の生い立ちを詳細にしかも正確に記録されたものであって、本学が将来成長発展する礎となる意義深い記録である。

本学はこの礎の上に、これから固有の学風を培い、誇り高い伝統を築き、特色ある医大として成長発展することを希うものである。

終りに、本書編纂に日々多忙の中尽力された編纂委員長高石敬三協力会事務局長、編集を専門に担当された北海道立三岸好太郎美術館長工藤欣弥氏、鋤柄栄氏はじめ資料蒐集にあるいは執筆に協力下さった関係各位に衷心より感謝の意を表する。

旭川医科大学長 山 田 守 英



旭川医大の発展を祈念して

この度、旭川医科大学が第1回卒業生を送り出すのを機会に、本書が刊行されることになりましたことは、同大学の誘致に携った一人として誠に感慨深いものがございます。

ご存知のように、北海道の医療事情は、医師の数が全国平均よりも少ない、医大が少ないということで、医療過疎地域が多くあり、従来から地域医療の充実は、北海道にとっては重要な課題になっていたわけです。

このような問題を解決するため、当時の第3期北海道総合開発計画の中で、国立医大の新設が計画され、その実現について、道民の多くから大きな期待を寄せられていました。医療体制の整備充実の問題は、ひとり北海道のみでなく、全国的にもそのような気運にあり、このような背景を踏まえ、国としても、国民の健康を確保する新しい保健医療体系の整備の一環として「一県一医科大学」の構想を打ち出したわけです。

こうした情勢から、医大の誘致を計画していた北海道をはじめ、同じ事情にあった各県は、我先にと名乗りを挙げ、熾烈な誘致合戦が展開され、北海道も知事を先頭に全力を投じ誘致運動を展開した結果、昭和47年度の国の予算編成時に北海道、山形県、愛媛県に設置が決定されたのです。

しかしながら、国は設置の時期を明確にしなかったことから、堂垣内知事は、道内の医療事情から一日も早い設置を希望し、そのため誘致の条件整備を早急にすることとなり、道内の市町村、経済界、産業界等、各層の支援を得て、昭和47年10月に「国立旭川医科大学設置協力会」が設置され、知事さんからのお話しもあり、私が初代の会長をお引受けすることとなったわけです。

協力会の主な事業は、医科大学開校のために必要な図書、機械器具等の整備、関連教育病院整備事業に対する助成、教職員宿舎の建設及び借上住宅の確保、ならびに仮校舎整備の助成等でありましたが、何分にも経験の無いことであり、事務局の職員の苦労も大変なものでしたが、幸い関係各位の皆様の絶大なご協力を得て、諸般の準備も順調に進めることができました。

その結果、昭和48年11月道民の待望久しかった、旭川医科大学が開学の運びとなったことは、道民の一人として誠に嬉しいことでした。十分なお手伝いはできませんでしたが、このような国家的な事業に関与させて頂きましたことを心から感謝いたしております。

その後、私も仕事の都合で会長の職を離れましたが、本年、第1回の卒業生が社会に巣立られたことは関係した者の一人として感慨新たなものがございます。今後とも、旭川医科大学が地域医療の中核機関として、その役割を十分に発揮されますことを祈念いたしまして私のごあいさつといたします。

財団法人国立旭川医科大学設置協力会
前会長 廣 瀬 経 一



発刊のごあいさつ

医療に恵まれない辺地の多い北海道は、医療機関の充実を図るため、昭和45年以来、国に対し医科大学設置を要望し、この実現に向かい北海道総合開発計画の閣議決定を得るなど、道民あげて活発な運動を展開いたしました。

その間、本道はもとより全国各地から医科大学の誘致運動が起こり、医療に悩む地域住民の切実さを示すものがありました。

そこで、国は全国的医療需要の増大と医師の地域的偏在等による医師の不足が問題となっている実情から、その在り方を検討するため医科大学設置調査会を文部省に設置しました。審議の結果、無医大県の解消を図るなどの大綱が決定され、医科大学設置の実現が可能となりました。

この動きに呼応して堂垣内知事は、誘致場所を道北地域の旭川市に決定し、早期実現に向かって更に強力な誘致運動を繰り広げました。その結果、48年9月戦後初めての単科大学としての旭川医科大学が設置されました。多年の願望が達成し全道民の喜びは言葉にあらわせないものがありました。

本協力会は、堂垣内知事をはじめ道内各界各層のご支援、ご協力と広瀬前会長のご尽瘁により大学の受け入れ体制の整備を行ない、大学設置に寄与できましたことに対し深く感謝申し上げます。

旭川医科大学第1回卒業生を世に送り出された記念すべき時にあたり、この喜びをともにわかち合いたく、旭川医科大学の歩みを記録編さんいたしました。

今後とも旭川医科大学の発展のため格別の御協力をお願い申し上げ、刊行のごあいさつといたします。

財団法人国立旭川医科大学設置協力会

会長 今井道雄



お礼にかえて

ここに、国立旭川医科大学の歩み発刊にあたりまして、心から御祝いと御礼を申し上げる次第であります。

北、北海道地域住民をはじめとして、北海道民554万人の長い間の悲願でありました国立旭川医科大学が、全国最初の医科系の単科大学として、地域社会に貢献されることになりましたことは誠に御同慶にたえないところであります。

昭和48年9月29日開学し、本年3月24日待望の第1期生が巣立ち、昭和54年度国家試験においては国立大学として最高位の快挙をなしとげました。その成果を誘致関係者一同感銘をいたしている次第であります。

顧りみますと旭川市が昭和24年6月、教育の機会均等を求め、真の教育こそ人間生活の福祉と幸福に直接寄与するものとし、道北、道東、北空知地域住民の総意のもとに高等教育機関の誘致をおこなうため、旭川大学設立期成会を設立いたしました。さらに、年々深刻化する道北地域の医師不足の解消をはかることを目的として、国立の医科大学を設置すべく地元関係者はもとより、北海道知事をはじめ北海道選出国會議員、北海道議會議員、各市町村長、議員、各界各層の各位の御支援のもとに道民あげて一丸となり、中央関係機関に対して精力的、かつ継続的に要請をして参りました。

その結果、20有余年の運動が実を結び旭川医科大学が誕生いたしました次第であります。

その間幾多の紆余曲折と数多くの困難な問題に直面するなど、広く各界の方々の御労苦は筆舌に尽せぬものがあり、さらに、設置決定から開学に到るまでの受入等、諸準備にあたられた財団法人国立旭川医科大学設置協力会、北海道大学、旭川医科大学創設準備室の関係各位の御協力に対して、ここにあらためて衷心より感謝の意を表する次第であります。

旭川医科大学は、上川離宮御造営地に宣達された由緒ある地に開学し、人命尊重を基本とし、地域医療の水準向上を目指し、本市の市立旭川病院を関連教育病院として学生の研修の場に活用されており、これが機能の充実には積極的に意を注いで参りたいと存じます。北方風土に密着した医師及び医学研究者が数多く育成されますことを

確信をいたしユニークな医科大学として発展されますことを期待するとともに旭川医科大学の誘致、開学、第1期生が巣立つまでの間、御支援、御協力を賜りました関係各位に対しましてお礼を申しあげ、ごあいさつといたします。

旭川市長 坂 東 徹